「白い大地は晴れて春」

北海道網走。高校３年生で幼い頃に母を亡くしたしっかり者の飛鷹晴美（１７）は、色覚障害がある寡黙な父、飛鷹斎（４２）に東京の美大進学を願い出るが、大反対されていた。

ある日、美術教師の大橋渉（２８）から絵画コンクールで大賞受賞したと知らされ大喜び。飛鷹に受賞と再度、進学のことを伝えるが、首を縦に振らない。

承諾を得れない晴美は大橋に背中を押され、説得の手段として美大の予備校の体験へ。一緒の大学に進学しようと約束をしている友人、亀川栞（１７）と行くが、予備校生との実力差に圧倒され意気消沈する２人。栞は、周りと晴美との実力差や嫉妬をぶつけ、一緒の大学に行かないと断言。晴美は愕然とする。

進学の許可が取れない、栞とは仲違い、予備校で実力差に困憊。事柄が重なった晴美は、大橋に弱音を吐く。すると、晴美の尊敬する画家と会う、受験の審査をするかもしれないからと誘われる。

だが当日、飛鷹が勤務中に事故。前から痛めていた膝が悪化、迎えに行く。春美は受験反対の理由が飛鷹の目と脚の代わりにしたいからだと激怒。慌てて大橋との待ち合わせに走るが間に合わず、全てが終わったと絶望。

晴美は大学進学を辞め、父を想い就職を決意。大橋は飛鷹に直談判をする。飛鷹は大橋から「見える景色は違っても感情は共有できる」と背中を押され、晴美の描く姿を見たいと伝える。早朝、流氷で埋め尽くされたオホーツク海を描く晴美。色覚障害で赤が青に見える飛鷹だが、白と青で描かれた絵。晴美とほぼ変わらない同じ絵を見て、その美しさに感動し涙する。

飛鷹に背中を押され受験をすることになった晴美。受験当日、課題は赤やオレンジ、様々な色のかぼちゃ。晴美は飛鷹を思い出し、全て青のカボチャを描く。見事受験に合格した晴美は、冬景色の残る網走と笑顔の飛鷹に見送られ満開の桜が咲く、春の東京へ旅立つ。

○　登場人物

飛鷹　晴美　（17）　高校生

飛鷹　斎（いつき）　（42）　晴美の父

大橋　渉　（28）　晴美の先生

亀川　栞　（17）　晴美の同級生

教師

○道の駅流氷街道網走・建物の裏（早朝）

三角屋根に『道の駅流氷街道網走』の看板。雪が積もっている。

日が昇りきっていない青白い空、水平線が見える澄み切った海。

壁に寄りかかり、うたた寝をしている防寒着を着た、飛鷹晴美（１７）。

片耳に青い絵具のついた筆を、挟んでいる。

モモの上のキャンバスには、精密に描かれた空と海の絵。

脇にはパレットや絵具が置かれている。

晴美の手から筆が落ちる。

晴美、ハッとする。頬に絵具がつく。

スマホの時刻は『０６：３０』。

晴美「わや！」

慌てて身支度をする。

○晴美の家・玄関・外（早朝）

黄色の外壁の一軒家。軽自動車も黄色。

キャンバスと画材を抱えた晴美、ポストから封筒を数枚出し、家の中へ。

○同・リビングキッチン（朝）

晴美の母の遺影が飾ってある仏壇に手を合わせ、立ち上がる制服姿の晴美。

遺影の横には、Ａ４サイズに色鉛筆で不格好に描かれたひまわり畑の絵が飾られている。

晴美、キッチンで２つ弁当をオレンジ色の風呂敷に包む。

晴美「昨日の残りだから汁漏れ気を付けてね」

身支度をしているスーツ姿の飛鷹斎（４２）、薄赤色のレンズの眼鏡をかける。

飛鷹「ああ」

飛鷹、窓から空を見上げ、目を薄める。

飛鷹「晴美」

晴美「なにー？あ、空？」

飛鷹「どう晴れているか？」

晴美、駆け寄り、一緒に空を見上げ、

晴美「晴天。雲1つない」

飛鷹「そうか」

晴美「一日中、晴だって」

テーブルに弁当箱2つと『奨学金制度案内』と『小平美術大学　入学願書』の書類を置く、晴美。

飛鷹、それを見て、ため息ひとつ。

飛鷹「駄目だ」

晴美「絵を見てから判断して」

飛鷹「見てどうする」

晴美「どうって、実力を見てほしいの」

飛鷹「無理だ、東京なんて」

と、少し片脚を庇いながらかがみ、弁当を取る。

晴美、脚のことに気づかない。

晴美「1週間後なの！締切！」

飛鷹「奨学金の意味、分かるか？」

晴美「それしかないじゃん」

飛鷹「就職にしなさい」

晴美「絵を描いて生きて行きたいの！」
飛鷹、日曜祝日がオレンジの文字色の
1月壁掛けカレンダーを見る。
カレンダーの２２日には『願書締切！』
と『流氷ガイドツアー』と書かれた日
が不定期に書かれている。
飛鷹「晴美」
晴美、ぶすっとしながら飛鷹を見る。
飛鷹、晴美の頬についた絵具を拭う。
飛鷹「今日は遅くなる」
と、弁当箱を差し出す。
晴美「気を付けて。しったけね！」
と、乱暴に受け取り、出ていく。
○能取岬・流氷で出来た海上の道
防寒着にスノーシューを履いた飛鷹、
トレッキングポールを突きながら進む。
その後に同じ格好の観光客が数名。
飛鷹、眼鏡越しに空を見上げる。
晴れてはいるが少し雲が広がっている。

飛鷹、眼鏡越しに目を細め、
飛鷹「ツアー日和ですね。雲１つない」
観光客、空を見上げ、首をかしげる。
○網走北高等学校・美術室
向かい合って勉強している、制服姿の
晴美と亀川栞（１７）。
机には赤本と、教科書の山。
晴美、ノートにペンを走らせながら、
晴美「あの絵、どこまで描いた？」
栞、ノートから顔を上げて、
栞「絵って、オホーツクの？」
晴美「天都山の。一緒に描いたやつ」
栞「あー、あれ。…内緒」
晴美、ガバッと顔を上げて、不満げ。
晴美「なんで。私の見せたじゃん」
栞「高校最後の作品だもん。先生に評価貰っ
て、応募したいし」
晴美「親友なのに！先に見せるなよー」
と、栞の身体を揺らす。

栞「ライバルには見せたくないんですー」
晴美「なにそれー」
笑い合う、晴美と栞。
ドアからスーツを着た大橋渉（２８）
が覗き込む。
大橋「飛鷹、ちょっと」
と、手招きする。
晴美、首を傾げながら立ち上がり、身
支度をする。
晴美「じゃ、しったけね！」
栞「うん。しったけね！」
と、手を振り合う。

○同・職員室
大橋、デスクにあるパソコンの画面を
晴美に見せる。
晴美、口を手で隠し、
晴美「わ、わや！？入賞！？」
大橋「やっぱり確認していなかったのか」
晴美「だって、発表、来週って」

と、手帳を出し、確認する。

晴美「あ」

と、そっと閉じ、へらりと笑う。

大橋、頭を掻き、ふっと笑顔になる。

大橋「初めてだよ。うちから入賞者出るの」

晴美「えへへ。ありがとうございます」

と、はにかむ。

大橋、引き出しから画集を出す。

表紙には、精密に描かれた風景画と

『廣尾春樹作品集』のタイトル。

右下にはサインが書かれている。

大橋「ほら。約束の」

晴美、満面の笑みを浮かべ、画集を受

け取る。

晴美「覚えててくれたんですか！神！仏様！」

と、画集をめくり、じっくり見る。

大橋「廣尾先生、志望大学の教授になるぞ」

晴美「え」

大橋「予備校、どこ行っている？」

晴美、目線をそらし、

晴美「実は、行ってなくて…」

大橋、目を見開く。

大橋「はぁ！？」

晴美「だってお金かかるし、そうなるとお父さんにお願いするしか…」

大橋、頭をガシガシ掻く。

晴美、苦笑いをしながら、

晴美「無料で受けれる予備校なんてないですよね、あははは」

大橋「あるぞ」

晴美「へ」

大橋「この大学に強い予備校がある。体験でいい。行ってきなさい」

晴美「体験？」

大橋「無料で出来るから」

晴美「ほ、ほんとですか！描いた絵を、説得の武器に出来る？」

大橋、笑顔で頷く。

晴美、画集を抱きしめ、満面の笑顔で、

晴美「行きます！」

○網走市役所そばの横断歩道～歩道（夕）

空が赤く染まっている。

信号が夕焼けで反射しており、赤信号なのか青信号なのか分かりづらい。

スーツ姿の飛鷹、眼鏡越しに目を凝らして信号を見る。

青になり、周りの通行人が歩き出す。

晴美、飛鷹の背後に駆け寄り、

晴美「渡れるよ」

飛鷹、肩を跳ね上げ、振り返る。

飛鷹「お」

晴美「へへ」

歩きだす晴美にため息をつく、飛鷹。

晴美、バッグから、黄色の背景に青で『三光展』と印字されたハガキを出し、笑顔で飛鷹に渡す。

晴美「これ。会場で見せれば入れるから」

飛鷹「ん？」

晴美「入賞したの！」

飛鷹「入賞？」

晴美「私の絵がだよ！すごくない！？」
横断歩道を渡り切った飛鷹、立ち止まり、ハガキをジッと見る。
飛鷹「そうか」
晴美「賞を取るぐらい実力あるんだよ。学業もバイトも、両立できると思うんだ」
と、服の袖をぎゅっと握る。
飛鷹、ふう、と息を吐き、夕日を見て目を細める。
雲と夕日の赤が綺麗に混ざっている。
晴美も夕日を見る。
飛鷹、歩き出し、そっけなく、
飛鷹「就職にしなさい。ここでも絵は描ける」
晴美、唇を噛み、飛鷹の背中を叩く。
飛鷹、よろけて振り返る。
晴美「バカ！」
と、飛鷹を置いて立ち去る。

○網走北高等学校・屋上
晴天。

網走の街並みと遠くにオホーツク海。
多くの生徒が思い思いに風景画を描いていたり、ふざけ合っている。
並んで絵を描いている、晴美と栞。
栞、晴美の精巧に描かれた絵をチラっと横目で見て、下唇を噛む。
栞の絵は少し色が濁っている。
晴美、筆を片耳に挟み、栞に顔を寄せ、
晴美「ね、夜、時間ある？」
栞「夜？」
晴美「予備校の体験に行こうと思うの」
栞、目を見開き、
栞「予備校！？え、今から？」
晴美「え？うん。志望校一緒だしさ。どう？」
栞「え、行ってないの？予備校」
と、戸惑う。
晴美「先生のお勧めなの。栞だって上手くなりたいでしょ？デッサンとか。お願い！」
と、顔の前で手を合わせる。
栞、ムッとして、自分の絵と晴美の絵

を見比べる。

栞「行く必要、あるの？」

晴美「え？」

栞、笑顔で、

栞「分かった。親に言っとく」

晴美「ありがとう！」

と、笑顔で栞に抱き着く。

○網走市美術館・正門・外

青の看板に『網走市美術館』。

門の脇には『三光展』の大きなパネル。

防寒着を着た人が、まばらに中に入っていく。

三光展のハガキを持った飛鷹、周りをうかがい引き返そうとするが、止まる。

ハガキを見て、深呼吸。眼鏡を外す。

振り返り、一歩踏み出すが顔を歪め、左膝を押さえる。

一息吐き、中へ。

○同・展示室

天井が高く、壁には隙間なく鮮やかな風景画や人物画が飾られている。

まばらに客が鑑賞している。

飛鷹、目を凝らしながら進んでいく。

畳1枚分ある絵の前で足を止める。

周りには数名、絵を眺めている。

絵の下に『あの日に　飛鷹晴美　内閣総理大臣賞』の札。

青空の下、能取湖に浮かぶ一つの遊歩道と、両脇に真っ赤なサンゴ草の群生が広がる絵。

飛鷹、周囲の客の表情をこっそり伺う。

笑顔の客や、スマホで実際の写真と見比べて頷く客の姿。

飛鷹、表情が和らぎ、絵を見る。

大橋の声「飛鷹さん、ですか？」

大橋、会釈しながら飛鷹の隣へ。

飛鷹、余所行きの顔で会釈する。

飛鷹「ああ。娘がお世話になっております」

大橋、笑顔で、ほっと息を吐き、

大橋「良かった。お会いできて」

飛鷹「えっと、なにか」

大橋、絵に体を向け、眺める。

大橋「この絵。見て頂きたかったんです」

飛鷹「はあ」

大橋「ハガキ、晴美さんから頂きませんでした？」

飛鷹「ああ」

と、ハガキを見る。

大橋「私が渡したんです」

飛鷹「ああ、そうでしたか」

と、苦笑い。

大橋「見事ですね。サンゴ草の紅葉」

飛鷹、わずかに目を見開き、

飛鷹「紅葉、ですか」

と、絵を見るが、目を伏せる。

大橋「賞も取られて。自慢の娘さんですね」

飛鷹、頭を掻く。

飛鷹「絵には、疎くて。お恥ずかしい」

大橋、首を横に振り、

大橋「全く。知識なんていりません。どうです？」

と、絵と飛鷹を交互に見る。

飛鷹「いや、ですから」

大橋「何でもいいんです。色でも景色でも」

飛鷹、首の後ろをさすりながら、

飛鷹「その、色覚が、良くなくて」

大橋、口からえっ、と声が出かける。

飛鷹「では」

と、頭を下げ、立ち去る。

○道の駅流氷街道網走・建物の裏（夕）

夕日に染まる広大な海を裸眼で見る、

飛鷹。

海には少し流氷が流れており、ぶつかっては離れていく。

飛鷹の周りには雪が積もっており、赤く染まっている。

飛鷹「赤、か」

と、ため息をつく。

○美大受験予備校・入口・外（夜）

ビルの壁に『美大受験予備校』の看板。

晴美、バッグの持ち手をギュッと握り、階段を上っていく。

その後を、口をへの字にした栞が、重い足取りで登っていく。

遠くの通りで帰宅中の飛鷹、２人に気づき、足を止める。

○同・教室（夜）

制服を着た大勢の生徒の姿。

個々に石膏像や静物を、Ａ３の画用紙に、前かがみになって描いている。

皆、精密で画力が高い。

鉛筆の擦れる音だけがしている。

席について辺りを見ている、晴美と栞。

晴美「…わや」

と、気おされ、唾を飲む。

晴美、芯が鋭く研がれた鉛筆をギュッと握り直し、目の前の石膏像を描いていく。

栞、晴美を見て描き始めるが、上手くいかず、手をおろす。

○歩道（夜）

筒状に丸めた画用紙を持っている、晴美と栞、街灯の下を並んで帰路へ。

晴美、気丈にふるまいながら、

晴美「いやー、世界広かったねー」

栞、俯き、街灯の下で立ち止まる。

栞「そう？」

晴美「え、栞は違った？す、すごいね！」

と、無理やり笑顔を作る。

栞「晴美は違うでしょ。差なんてなかった」

晴美「栞？」

栞、画用紙をギュッと握る。

栞「実は滑り止めで札幌の美大、入れてるの」

晴美、ポカンとする。

晴美「滑り止め？」

栞「予備校だって、今日、初めて行ったんでしょ？みんなに負けてなかった」

晴美「そ、そんなことないよ。栞だって」

栞「センスが足りないの！」

晴美「せ、センスって」

栞「晴美は少しの努力でいい！けど、私は…」

と、ついに画用紙を握り潰す。

晴美、何かを言いかけるが、言葉にならず、口をつぐむ。

栞「一緒のなんて、無理。夢だよ」

と、晴美の横を走り去る。

晴美、唇を噛み、画用紙をグシャっと握り潰す。

○晴美の家・リビングキッチン（夜）

ドアが開き、俯いた晴美が入ってくる。

バッグに無理やりねじ込んだ画用紙が、はみ出ている。

晴美「ただいま」

キッチンに立つ、上着を脱いだスーツ姿にエプロンをつけ、眼鏡をかけている、飛鷹。

豚肉のロースを焼いている。シャツにはシミ。

飛鷹「ああ、丁度良かった。どうだ？」

と、肉を皿に移し、ハサミで切る。

晴美「見づらいの？」

飛鷹「生だったら嫌だろう」

晴美、肉の切れ目を見て、

晴美「うん。火、通ってる」

飛鷹「どうだった？」

晴美「何が？」

飛鷹、夕飯の支度をしながら、そっけなく、

飛鷹「予備校」

晴美「え、なんで」

飛鷹「どうだった？」

晴美「…怒らないの？」

飛鷹「行く前に相談はしなさい」

晴美「あー、はい」

飛鷹「で？」

晴美「あー、なんも？」

と、はみ出た画用紙を押し込む。

飛鷹「楽しくなかったのか？」

晴美「え、ううん！楽しかったよ！ね、早く食べよ！」

と、乱雑に飛鷹のバッグの横にバッグを置き、飛鷹の手伝いを始める。

飛鷹のバッグの前ポケットから、三光展のハガキがはみ出ている。

○道の駅流氷街道網走・建物の裏（早朝）

雪をかき分け、キャンバスを抱えしゃがむ、晴美。

日が昇り切らず、白と濃い青の空。

広大な海を敷き詰める、薄い青色に染まった流氷。

晴美、白い息を吐き、手を摩る。

キャンバスには描きかけの風景画。

晴美、筆を乗せようとするが、一瞬止める。

晴美「センスって、何それ」

と、口をへの字にさせ、描き始める。

○網走北高等学校・教室

予鈴が鳴る。

身支度をしている、晴美。

向かいの席の栞に声をかけようとするが、口ごもる。

そそくさと支度をした栞、教室を出ていく。

晴美、小さくため息。

ドアから、大橋が顔を出す。

大橋「飛鷹、ちょっと」

晴美、バッグを肩にかけ、駆け寄る。

○同・教員室

椅子に座り、腕を組んで卓上カレンダーを見ている、大橋。

大橋「お父さん、ダメか？」

向かいに立つ晴美、モモの前で手を揉む。

晴美「全然」

大橋、姿勢を正し、

大橋「夕方1時間でいい。時間あるか？」

晴美「え、あ、はい」

大橋「廣尾先生が展覧会の関係で、こっちに来る」

晴美、目を見開き、

晴美「わや！？え、来るんですか！？」

大橋「会っておきなさい。もしかしたら受験の講評、先生の可能性もある」

晴美「え！」

大橋「絵を見てもらいなさい」

晴美、俯き、服の袖をギュッと握る。

晴美「あの、先生」

大橋「ん？」

晴美「私、東京の美大に通用しますか？今の画力で」

大橋「え？何、どうした？」
晴美、眉をハの字にさせ、指を揉む。
晴美「予備校行ったんです。賞を取ったし、誰よりも上手いって思ってたんですけど、…その」
大橋、晴美の目をしっかり見ながら、
大橋「絵は比べるものじゃない。尊重しあって高めていくものだ。あそこはそういう場所だ」
晴美、頷くが、納得していない顔。
大橋「飛鷹は、どういう絵を描きたい？」
晴美「私は…」
大橋「願書締切まであと3日。美術館に18時。いいか？」
晴美、頷く。

○網走市役所・外観

○同・観光課

防寒着を着た飛鷹、デスクで弁当を風

呂敷に包んでいる。
脇に眼鏡が置かれている。
腕時計を見て、慌てて弁当をバッグにしまい、脇に置いてあるトレッキングポールを持ち、立ち去る。
眼鏡は机に置かれたまま。

○能取岬・流氷で出来た海上の道～階段
防寒着にスノーシューを履いて、トレッキングポールを突きながら進む、眼鏡をかけていない、飛鷹。
その後に同じ格好の観光客、数名。
飛鷹、目を細め、海を見渡す。
海は遠くまで流氷で埋まっている。
飛鷹「今年はかなり早い方で、ここの流氷は例年だと2月上旬からが時期なんです。皆さん、ラッキーですね」
飛鷹、目をこすり、空を見上げる。
雲1つない空。
飛鷹、そばの階段を指さし上り始める。

目を細め、足元を見ながら慎重に上る
が踏み外し、派手に転ぶ。
慌てて駆け寄る、観光客。
飛鷹、左膝を抱えたまま、動けない。

○海岸に面した緩やかなカーブ道（夕）
オホーツク海に広がる流氷をバックに
晴美、積もった雪を避けながら帰宅。
晴美、浮かない顔。
防寒着を身に着けた団体とすれ違う。
晴美、勢いよく振り向く。

○網走市美術館・エントランス（夜）
ソファに座っている、大橋と廣尾先生。
大橋、廣尾先生と談笑しながら、壁掛
け時計を見る。時刻は『１８：１０』

○晴美の家・リビングキッチン（夜）
スーツ姿の飛鷹、晴美に肩をかりなが
ら左脚を引きずり、ソファに座る。

晴美、壁掛け時計を見る。
時刻は『１８：４０』
晴美、顔を歪め、飛鷹から受け取ったバッグと上着を強く握りしめる。
晴美「脚、なんで言ってくれなかったの」
飛鷹、膝をさすっている。
飛鷹「そこまで酷くなかったんだ」
晴美「言ってくれれば病院だって調べたのに」
と、バッグを片付けようとするが、前ポケットからはみ出ているハガキが目に留まり、取り出す。
晴美、三光展のハガキを見て、目を見開き、
晴美「これ」
飛鷹「あ、ああ」
と、頭を掻く。
晴美「行ったの？」
飛鷹、首の後ろをさすり、目線をうろつかせる。
晴美「どうだった？」

飛鷹、晴美に顔を向けるが、口ごもる。
晴美、顔を歪め、ぐしゃっとハガキを
握る。
晴美「大学反対なのってさ、」
飛鷹「ん？」
晴美「就職なら、そばで目の代わりになるし、
脚の代わりになるから？」
飛鷹、ハッとして、首を横に振る。
晴美「上手くないくせに、って？」
飛鷹「違う」
晴美「東京に行かせたくないんでしょ！」
と、ハガキとバッグを床に叩きつける。
飛鷹「晴美、」
飛鷹、晴美に手を伸ばす。
晴美、振り払いリビングから出ていく。
飛鷹、立ち上がろうとするが、膝を押
さえ、体制を崩す。
ため息をつき、頭を抱える。

○海岸に面した緩やかなカーブ道（夜）

晴美、制服姿のまま、走る。
手にはサイン入りの画集とキャンバス。

○網走市美術館・エントランス（夜）
入口を伺っている、大橋。
廣尾先生、腕時計を確認している。
大橋、ソワソワと落ち着きがない。

○同・正面入口・外（夜）
晴美が走って来る。
館内の照明が落ちている。
晴美、ドアの取っ手を何度も引っ張るが開かない。
ドアには『閉館』のプレートがかかっている。
ドアの取っ手を握ったまま、ずるずるとその場にしゃがみ込む。
晴美「くそ」
と、泣き始める。

○晴美の家・晴美の部屋（夜）

机に置いてある、願書の書類を手に取る、晴美。

破ろうとするが、手を止める。

また破こうとするが、止める。

晴美、涙を流しながら、願書をゆっくり破いていく。

晴美、目元を拭い、手帳片手にベッドに座る。

手帳を開き、１月のカレンダーの『願書締切』の文字をペンで塗りつぶす。

机には、晴美の母と飛鷹（３２）、晴美（７）の笑顔の写真が飾られている。

晴美、メモ欄に『就職先』を書く。

ふーっと息を吐き、壁に頭を預ける。

晴美「これでいいんだ」

と、顔を手で覆う。

○道の駅流氷街道網走・建物の裏（早朝）

日が昇りきっていない、青白い空。

海が流氷で埋め尽くされている。
雪が散る中、かき分けた雪の間に座っている、防寒着を着た晴美。
ぼーっと海を見ている。
耳に挟んだ筆が、モモの上にあるキャンバスに落ちる。
青の絵具が絵につく。
アラームが鳴る。
晴美、ハッとしてキャンバスや頭に乗った雪を払いながら、身支度をする。

○晴美の家・リビングキッチン（朝）
朝食を食べている飛鷹。
その前に弁当を1つ置く制服姿の晴美。
晴美「ねぇ、お父さんの部署って大変？」
飛鷹「ん？いや」
晴美「他は？」
飛鷹「部署による」
晴美「そっか」
と、身支度を始める。

飛鷹「どうした？」
晴美「ううん。しったけね」
と笑顔を作り、出ていく。

○網走北高等学校・職員室
大橋、食べかけのパンを落とす。
向かいには顔を引き締めた、晴美。
大橋「就職？」
晴美「はい。役所なら手堅いし。絵を描く時間も作れるかなって」
大橋、立ち上がり、晴美の肩を掴む。
大橋「大学は！？」
晴美、顔をしかめ、肩を見る。
大橋「ああ、ごめん」
と、手を放す。
大橋「この間のことは気にしなくていい。当日で急だったし廣尾先生も怒ってなかった」
晴美「そのことは本当にごめんなさい」
大橋「何か、あったのか？」
晴美、苦笑いをし、

晴美「全然」

大橋「お父さんは」

晴美、大橋の声にかぶせるように、

晴美「せっかく応援してくれたのにごめんなさい。あとこれ」

と、サイン入りの画集を渡す。

晴美「私には眩しすぎます」

大橋「え。でもこれ」

晴美、一礼し、出ていく。

大橋「飛鷹！」

大橋、画集を見つめる。

大橋「良くないだろう」

と、椅子に力なく座り、天を仰ぐ。

卓上カレンダーを見て表情を硬くする大橋。引き出しから分厚いファイルを取り出し、書類を探る。

○同・玄関・中

バッグを肩にかけた晴美、上履きからシューズに履き替えている。

キャンバスを持った栞、息を切らして
晴美に近づく。
栞「晴美！大学行かないって！」
晴美、振り返り、バツが悪い顔で頭を
掻く。
晴美「うん。約束守れなくてごめんね」
栞、キャンバスを晴美に見せる。
紅葉の天都山の下に広がる網走市街と、
鮮やかな青のオホーツク海が広がる絵。
晴美、笑顔で、
晴美「綺麗」
栞「ごめん」
晴美「ん？」
栞「コンクールで賞取ったって知って、嫉妬
してたの。予備校の時も」
晴美、首を横に振る。
栞「好きだから描いてるって知ってるのに。
ごめん」
晴美「私もごめん。栞の気持ちに気づけなく
て」

栞「ね？大学、行こうよ」

晴美、ゆっくり首を横に振る。

晴美「私が、就職するって決めたの」

栞、顔を歪ませキャンバスで顔を隠す。

晴美「ずっと描いていくよ。この街を」

と、眉をハの字にさせ、栞の背中をさする。

○網走市役所・正面玄関・外（夕）

駆け足で玄関に入っていく、サイン入りの画集を持った大橋の姿。

○同・観光課・受付・前（夕）

天井から『観光課』のプレート。

予鈴が鳴っている。

息を切らした大橋が受付へ。

辺りを見渡す。

大橋と目が合う、眼鏡をかけた飛鷹。

片脚を庇いながら大橋に近づき、会釈をする。

○同・3階・食堂（夕）
食堂のテーブルに向かい合って座っている、大橋と飛鷹。
窓から夕陽がさしている。
大橋「先日は失礼しました。その、目の事で」
飛鷹「いえ。見た目では分かりませんから」
大橋、サイン入りの画集を差し出す。
大橋「晴美さんに差し上げたのですが、就職するからと返されてしまいました」
飛鷹、目を見開き、前のめりになる。
飛鷹「就職、ですか？」
大橋「役所希望だそうです。聞いてませんか？」
飛鷹、俯き、左膝を摩る。
飛鷹「今、知りました」
大橋「こちらの画家さん、ご存じで？」
飛鷹「いえ」
大橋「晴美さんが希望する大学の教授になる方です。サインを欲しがるぐらい、尊敬している画家です」

飛鷹、画集をめくっていく。
眼鏡をかけ直し、目を通していくが、
徐々に眉を下げていく。
大橋「展示されていたあの絵、どう感じましたか？」
飛鷹、画集を閉じ、大橋に突き出す。
飛鷹「ですから、色覚が」
大橋「見える世界が違うのは当然です。晴美さんが見た景色は私も分かりません。けど感情は共有できます。それではダメですか」
飛鷹、ハッとし、大橋を見る。
大橋「どう、感じましたか？」
飛鷹、画集をジッと見て、
飛鷹「晴美が小さい頃に、亡くなった妻と3人で行った場所なんです。綺麗だねって、散歩しました」
と、ふっと笑う。
飛鷹、窓の外を見る。
遠くに流氷で埋め尽くされている海と、
道の駅の三角屋根が見える。

○道の駅流氷街道網走・建物の裏（夕）

壁に背を預け、海を眺めている、晴美。

鼻をすすり、目元を拭う。

○網走市役所・3階・食堂（夕）

飛鷹、目を細め、夕日を見ている。

飛鷹「朝日が昇る頃、晴美は海を描きに行くんです。でも、見せてくれって言えなくて」

大橋、夕日を見て、

大橋「見える景色が違うから、ですか？」

飛鷹、首を横に振り、眼鏡を取る。

飛鷹「朝焼け前の海は青白いんです。私は赤が緑に見える」

大橋「じゃあ」

飛鷹「ええ。そんなに誤差は起きないはずです」

飛鷹、ふっと笑い、大橋を見る。

飛鷹「感動したら、送り出したくなるじゃないですか。あの子の描く絵は、絶対に上手いです」

大橋、ポカンとする。

飛鷹「まだ17で、東京で一人暮らしなんて。泣いて帰って来るんじゃないかって」

大橋、微笑む。

大橋「二人三脚で歩んで来れたのですから、大丈夫です。しっかりしてます、晴美さん」

飛鷹、大橋を見て、薄く微笑む。

○晴美の家・リビングキッチン（夜）

食事をしている、晴美と飛鷹。

飛鷹、何でもないふりをして、

飛鷹「絵、どうだ？」

晴美、首をかしげる。

晴美「絵？絵って、学校の？」

飛鷹「描いているだろう。朝、海を」

晴美、キョトンとする。

晴美「うん」

飛鷹「どこまで進んだんだ？」

晴美「まだ途中だけど」

飛鷹「そうか」

飛鷹、口ごもり、食事を再開する。
晴美、戸惑いながらも同じく食事を再開する。
飛鷹、壁掛けカレンダーを見る。
『願書締切！』が黒で塗りつぶされており、下に『就職相談』の文字。
飛鷹「朝、起こしてくれ」
晴美「早いの？ツアーは外れたんでしょ？」
飛鷹「見たい。その、描いているところを」
晴美「描いてるところ…絵を？」
と、ポカンとする。
飛鷹、ご飯を口には運びながら、晴美を見ずに頷く。
晴美、おずおずと頷く。

○同・飛鷹の部屋（早朝）
薄暗い部屋。飛鷹がベッドで寝ている。
防寒着を着こんだ晴美、飛鷹の身体をゆする。
晴美「お父さん、起きて」

飛鷹、唸りながら体を起こす。

晴美「1時間後には、日が昇っちゃうから」

飛鷹「ん、ああ」

と、ベッドから出る。眼鏡を取ろうとするが、止める。

晴美、脇に置いておいたキャンバスと画材を持つ。

キャンバスの絵をしばらく眺め、部屋を出る。

○道の駅流氷街道網走・建物の裏（早朝）

海を埋め尽くす流氷と、日が昇ってない薄明るい青白い空。

足で雪を踏みつけ、2人分の座る場所を作っている、晴美。

隣で白い息を吐き、海を見ている飛鷹。

眼鏡をかけていない。

晴美、飛鷹の顔を見て口を開けるが、

一度閉じ、

晴美「日が昇ると少しはマシになるんだけど。

寒かったら言ってね。カイロあるから」
飛鷹「ああ」
並んでしゃがみ込む、晴美と飛鷹。
絵を描き始める、晴美。
飛鷹、手を擦りながら、海を見ている。
飛鷹「描くの、楽しいか」
晴美「うーん。楽しくはないかな」
飛鷹「ええ？」
晴美「だってパースがくるったり、絵具が変な色になっちゃって失敗するし」
と、筆を片耳に挟み、別の筆に別の色の絵具をつけ、描いていく。
飛鷹「楽しくないのに描いているのか？」
晴美「それも好きだから。絵を描くって簡単じゃないの。失敗の繰り返し。でもそれが完成までの1番の近道。だから好き」
と、笑顔になる。
飛鷹、目を細め、晴美を見る。
飛鷹「うん」
晴美「ほら、この景色。今の時期にしか見れ

ないでしょ？好きなの」

飛鷹「そうか」

晴美「能取湖もそう。散歩したところ」

飛鷹、微笑み頷く。

晴美「進学しなくてよかったかも。来年もこの海が描ける」

と、笑顔で絵を描く。

飛鷹、海を見ながら瞬きを数回。

少しためらいながらも、絵を覗き込む。

精密に描かれた流氷の海と、柔らかな青白い空の絵。

飛鷹、目を見開く。

真剣に絵と海を交互に見る、晴美。

徐々に真剣になっていく晴美を見て、

飛鷹、口を震わせ、目元を片手で覆う。

飛鷹「晴美」

晴美「ん？寒い？あ、膝、痛む？」

と、筆を止め、飛鷹を見る。

○晴美の家・玄関・外

キャリーケースを抱え、防寒着を着た晴美。

バッグを持った飛鷹、玄関のカギを閉めている。

晴美「本当に大丈夫？」

飛鷹「未成年は1人でホテル泊まれないだろ」

晴美「そうだけどさー。膝、平気なの？」

飛鷹「大丈夫だ。ほら、行くぞ」

と、眼鏡をかけ、車に乗り込む。

その後に続く晴美、ちょっと微笑む。

○小平美術大学・正門・外

入口には『小平美術大学　入学試験会場』の看板。

多くの防寒着を着た制服姿受験生が門をくぐって行く。

晴美、受験票を両手で握りしめ、唾を飲む。

その背中を優しく叩く、飛鷹。

飛鷹「思う存分、描いてきなさい」

晴美、深呼吸をする。

晴美「うん。しったけね！」

と、踏み出す。

○同・受験会場

複数の四角い台を囲むようにイーゼルが並んでいる。

台の上には盛り上がった何かに、白い布がかぶせられている。

イーゼルの上にはキャンバス、その前に座る制服姿の受験生が大勢いる。

イーゼルの高さを調節したり、画材を取り出す音だけが響く。

晴美、唾を飲む。

受験番号とイーゼル右下に貼られた番号を照らし合わせながら、椅子に座る。

教師が入って来る。

姿勢を正す、受験生と晴美。

台の上の膨らんだ布を取る、教師。

大小さまざまな赤のかぼちゃが、飾ら

れている。

目を見開き固まる、晴美。

晴美「わや」

教師「では、始め」

一斉に筆をとり、キャンバスに絵を描き始める受験生の姿。

晴美、チラっと周りを見る。

受験生が次々とキャンバスに赤や濃い赤の絵具を置き、カボチャのシルエットを描いていく姿。

晴美、意を決してパレットと筆をとる。

○ホテル・飛鷹、晴美の宿泊している部屋

膝を庇いながらベッドに座る、飛鷹。

手には妻の写真と折りたたまれた紙。

飛鷹、紙を広げる。

色鉛筆で不格好に描かれた、ひまわり畑の絵。

飛鷹、窓の外を見る。

空は雲で覆われ、グレー色。

飛鷹、写真と絵を両手で握りしめ、額に当てる。

○小平美術大学・受験会場

晴美、筆に付いている、くすんだ赤をキャンバスにのせようとするが、手が止まる。

窓の外を見る、晴美。

空は雲に覆われ、グレー色。

隙間から、わずかに青空が見える。

晴美、カボチャをジッと見て、耳に筆を挟む。頬に赤の絵具がつく。

別の筆で再び絵具を練り直し、濃い紫みの青をキャンバスに勢いよく乗せ、カボチャのシルエットを描いていく。

○ホテル・飛鷹、晴美の宿泊している部屋

ドアが開き、画材とバッグを持った晴美が入って来る。浮かない顔。

飛鷹、立ち上がり、晴美に近づく。

飛鷹「お疲れ」

晴美、画材とバッグを落とす。

飛鷹、拾おうとするが晴美が抱き着く。

飛鷹「晴美？」

晴美、顔を歪ませ、泣き始める。

晴美「頑張ったよ」

飛鷹、両手を宙で右往左往するが、頬の絵具に気づき、拭う。

飛鷹「ああ」

と、晴美を抱きしめ返す。

○海岸に面した緩やかなカーブ道

晴天。オホーツク海には流氷が広がっている。道に雪はない。

笑顔で走る、制服姿の晴美。

片手には1枚の書類。

○網走北高等学校・職員室

椅子に座ってペンをクルクル回している大橋。ソワソワと落ち着かない。

ドアが開き、晴美が入って来る。
大橋、勢いよく立ち上がる。
足取りが重く、俯いている、晴美。
大橋、唾を飲み、頭を掻く。
大橋「あー、大学に年齢制限はないから」
晴美、ブッと吹き出し、書類を見せる。
書類には『合格通知書』の文字。
大橋「え」
晴美「先生のお陰。ありがとう」
大橋、書類を両手で持ち笑顔で、
大橋「そうか、合格か！やった！」
と小躍りする。
晴美、笑顔。

○天都山展望台
晴天の下、キャンバスに絵を描く、晴美と栞。
晴天。天都山の下に広がる網走市街と、鮮やかな青のオホーツク海が広がっている。

栞、晴美の絵を覗き込む。
精密に描かれた絵。青の色が多い。
栞「そう描くか」
晴美、栞の絵を覗き込む。
色の濁りが少なく綺麗にまとまった絵。
晴美「へぇ、そう描くのか」
晴美と栞、顔を見合わせ、笑う。
栞「もう一緒に描けないねー」
晴美「描けるよ。ここの景色、好きでしょ？」
栞、ふふっと笑い、
栞「うん。また描こう。夏とか良さそう」
晴美「いいね！じゃあ、夏休みに」
栞「しったけね！」
晴美「しったけね！」
晴美と栞、笑顔で頷く。
○晴美の家・玄関・外
車にバッグやキャリーケースを積んで
いる、晴美と飛鷹。
晴美「手伝わなくて平気だよ。痛めるよ」

飛鷹「このぐらい」
と、バッグを持つが顔をしかめ、膝をさする。
晴美、飛鷹からバッグを受け取り、肩を貸す。
晴美「もう。言わんこっちゃない」
と、バッグドアの開いた荷室の縁に、飛鷹と一緒に座る。
飛鷹、膝をさすりながら何気なく、
飛鷹「描けたのか、あの絵」
晴美「え、うん。もう出来たよ」
飛鷹「赤色は、あったか？」
晴美、ふっと微笑み、
晴美「ううん。ないよ。青と白」
飛鷹「そうか」
と、笑顔になる。
飛鷹、後ろの荷物の中からサイン入りの画集を取り出す。
晴美、目を見開き、
晴美「それ！どうして」

飛鷹「先生から渡されたんだ」
晴美「え」
飛鷹「お陰で晴美を送り出せる」
晴美、受け取り、表紙を撫でる。
晴美「朝ね、海を描いてる時、お父さんにはどう見えるかなって思ってた」
飛鷹、頷く。
晴美「どう見えても綺麗だなって、感じて欲しくて描いてた」
飛鷹、微笑み、
飛鷹「綺麗だった。コンクールの絵も」
晴美、ハッとして飛鷹を見る。
晴美「そうだよ！どうだった？」
飛鷹「母さんと行った、あの景色のままだった」
晴美「わや！やった！」
晴美、笑顔になる。

○小平美術大学・正門・外
晴天。門には『小平美術大学』の看板。

門の脇の桜が満開。
大勢の学生が出入りしている。

○同・美術室
キャンバスに向かって絵を描いている、晴美。
手に数本筆を持ち、耳に青の絵具が付いた筆を挟んでいる。
その隣で晴美の絵の指導をしている、廣尾先生。
晴美、笑顔で頷く。

○晴美の実家・晴美の部屋
壁に青色と緑色で描かれた、大小様々なカボチャの絵と流氷の絵。
窓からは青空が広がっている。

（了）